

道元禅師シンポジウム特集

1999年10月23・24日 於：スタンフォード大学

道元禅師ご生誕800年を迎えて

北アメリカ開教総監
秋葉玄吾

道元禅師は西暦1200年に誕生され、2000年が丁度ご生誕800年に当たります。

道元禅師は1253年に遷化されました。53年の生涯でした。2002年が750回の大遠忌です。道元禅師の生死の節目は世紀の変わり目と嵩なっております。これらのことどもを記念して、日本では道元禅師に係わる様々な行事が予定されております。

ここアメリカでは、カリフォルニアのスタンフォード大学に於いて、海外では初めての道元禅師シンポジウム及びカンファレンスがこの10月23、24、25、26日の4日間にわたって開催されます。

ところで道元禅師は世界史的にどのような時代背景の中に生きてのでしょうか。世界史年表で俯瞰してみますと、社会の激動の中、新しい時代を拓き開いていく民衆文化が萌芽胎動している時代と思われれます。すなわち、人文主義（ルネッサンス）時代の先駆をなす、真摯な新しい思想文化の追求者が始動しはじめた時代と言えます。

さて、我が道元禅師は、1227年宋より如浄禅師の証明を受け、帰朝いたします。世界から隔絶された東海の島国・日本で、「一毫も仏法なし」と逆説的に表明され、後26年間、人煙を離れ、坐禅の実践を通し、多数の著述を残されました。「正法眼蔵」の大著をはじめ、「宝慶記」「普勸坐禅儀」「学道用心集」「典座教訓」「知事清規」、また侍者の聴聞集に「随聞記」「永平広録」などがあります。それらの中で、道元禅師は、宗教と思想と詩と実践が渾然一体となったすぐれて傑出した禅仏教の体系的思索を展開しています。人間の実存性ばかりではなく、あらゆる存在物の本質的実存性へとその思考は及びます。

中世時代に生きて道元禅師の先駆的な全体的思考の特徴に触れますと、その簡潔な要旨は次のように述べられると思えます。

通常、思索し認識するプロセスは、認識の主体と対象と

の相対関係により成立しています。認識の主体が対象を認識する場合、対象が抽象的なものであれ具体的なものであれ、主体それ自身を認識しえないものとして固定します。道元禅師の場合、このような主体と対象との相関性も、固定した主体も徹底的に取り払っていく、と言えます。道元禅師は、通常の意味の認識関係をどこまでもしりぞけます。禅の心髄はこの思考法にあります。道元禅師は、主体と対象との相関性を超えた、あるいはそれを離れた世界、いいかえれば、現在ここに開示されている世界、現在の事実そのもの実存性を究明して止みません。したがって究明している道元禅師の主体そのものは、今、ここに開示されている世界の中に解消し、あるいはそれに同化します。別に言えば、主体は世界そのものとなり、その世界の根源性を追求していく。そしてついにありとあらゆる存在物の絶対平等性、全肯定へと行きつきます。道元禅師の思索の中では、いかなる一物も徹頭徹尾、自由自在に遊泳しております。もともとダンマがそうであったのです。

道元禅師は論じます。「全宇宙は一つの明るい珠である」「実在はすべて時間である」これらの論考は、ブッダ・ダンマそのものとなった（只管打坐）主体の根源的な表現、最も美しくかつ真実な表現といえます。道元禅師は禅仏教の思想と実践を体系化した禅者であったのです。

次に道元禅師と同時代人とも言える、あの「神学大全」を著した、西洋の代表的な思考法を展開したトーマス・アクイナスの思想を要約してみたいと思います。

「彼によれば、人間は知性的な魂に、形相としての肉体が合一した存在である。それゆえ、実物の本質を直接把握することが出来ず、感覚的な個物から、能動的理性によって抽象化し、それを理解する。

信仰と理性とは最終的真理では重なるにしても、異なった働きであり、例えば神の存在証明は、信仰によるというより、理性によって理解され得るものである。ただし、神の本質は有限の存在である人間の理性では理解出来ない、否定と類比を通してそれに接近することが出来る。理性によって把握される神に関する知識は自然神学が、啓示によって把握されるそれは啓示神学が担う。」（哲学事典）

このような思想はカソリック神学の最高峰として現代に

まで伝えられているといわれております。(二人の思想の比較検討は他にゆずります。)

私は同じ時代を生きた東洋の涯の日本の宗教者・道元禪師と、西洋の伝統的な宗教者・トーマス・アクイナス、この二人の巨人の圧倒的な思索のその質の違いに驚かされず、また大変興味深いことには、後の世の多方面に影響を与えた典型的な西洋と東洋の物の考え方の相違のように思われることです。理性による自然科学的技術文明と共生の世界観による直感的、感性的文化の創出へと、それらは接続しているように思われます。

さて、この20世紀は、文化的に東洋と西洋の正式な全面的出会いが行われ、互いに影響を与えあった世紀といえるでしょう。21世紀を迎える現在においても人間の営為は多様に展開されています。つぎの21世紀は人類文化文明の融合時代であってほしいものです。

21世紀は政治歴史学者のポール・ケネディー氏によれば、人口、食糧、資源、自然環境、技術工業力の格差などの問題が地球的規模の人類の苦悩となるであろうと予測されております。これらの問題を解決していくのは畢竟人間の叡智による他ありません。

道元禪師の禪仏教はまちがいなく人類の知恵の遺産のひとつであります。

幸いにこの半世紀ほどの間に道元禪師の禪仏教を只管打坐を通して修行、求道する人々が多数欧米に現れ、多くの禪センターが創設されてまいりました。かなりの数のすぐれた指導的僧侶も輩出してきております。また、道元禪師の著作を通じ、学問的にその人と思想を追求する学者が産まれ、道元禪が論ぜられるようになってまいりました。

それら代表的な方々の参加を願い、ここに西暦2000年の新しい世紀を迎えるにあたり、生誕800年を記念し、道元禪師シンポジウム・カンファレンスが開催されることになったのです。

引き続き10月25日・26日と開催されるカンファレンスには、アメリカの道元禪学者が一同に会し、学問的に多彩な発表が行われるでしょう。興味深いものがあります。

このアメリカの地において、「慕古・・・振り返れば未来」道元禪の人、思想、修行、そして人類の未来へ(環境・平和・人権)と題し多彩に論ぜられることは、道元禪師の禪仏教がさらに世界へ向かって開かれてゆく契機となればまことに幸いなことであります。このシンポジウムはその時宜を得た絶好の機会を設けたものと言えます。

願わくば無事成功裡に円成し、道元禪師がご嘉納いただけますよう祈ります。多くの皆様においでいただき、この記念のシンポジウムの成果を頌ち合えますことを願っております。

道元禪の現代性とそのアメリカ伝播

スタンレイ・ワインシュタイン

日本の仏教の歴史の中で13世紀前半は、後に二つの浄土教の宗派(浄土宗と浄土真宗)、二つの禪宗(臨済宗と曹洞宗)、そして日蓮宗となる、新しい仏教創立に向かう激動の時期でありました。これら五つの宗派は、後にまとめて鎌倉新仏教と呼ばれますが、主に個人をその教えの対象としていました。旧仏教の天台宗や真言宗が朝廷や貴族から庇護を受け、国家鎮護や上層貴族の息災を祈ることを主要な任務としていたのと好対照をなすものです。新しい宗派が必ずしもそういうことに全く関係しなかったわけではありませんが、傾向として、その教えの対象を個人においていました。浄土教は阿弥陀仏の浄土に往生することをその目標とし、日蓮の信者達は、法華経の信仰によって現世の災難を避け、そして成仏しようとしていました。禪宗は正しい法の修行を通して解脱と悟りを、日常生活の中に達成しようとしていました。

臨済宗の禪は12世紀の終盤から何人かの人々によってもたらされたのですが、曹洞宗の禪は対照的に、中国で曹洞宗系の如浄から法をついだ道元希玄(1200~1253)ただひとりによって1227年に日本に紹介されました。鎌倉新仏教の特徴の一つは、彼等の精神的な目標が特定のただ一つの行に専心する事によって実現される、という信条でした。浄土教では阿弥陀仏の名を唱える念仏によって具現される阿弥陀如来の一切を済度せんとする誓願に対する信仰がそれでした。日蓮宗では、ただひとつ必要な行は法華経の題号を唱える題目でありました。道元においては、諸仏諸祖が行じてきた坐法でひたすら坐る只管打坐がその一行でした。

時間的に見ると、道元は他の鎌倉新仏教の宗祖と同じく、13世紀の前半に活躍しました。しかし、道元の思想には顕著に現代と響きあうものがあります。道元の時代には、仏教僧侶が、災難を逃れ、病気を平癒し、富みと権力を檀越にもたらす祈禱をするのは当たり前のことでした。事実、日蓮は正しい仏教であるかいなかを判定する基準は、その教えに上述のような奇跡的な現世利益の力があるかどうかだという考えを持ちつづけました。一方道元はそれらの占い、占星術、数秘学を業とする僧侶を痛烈に批判しました。そして自分の弟子達には、仏法の為には仏法を行じ、物質的な利益を得るために奇跡を行ってはならないと厳しく要求しました。

禪宗の伝統を受け継ぐものとして、浄土教や日蓮宗の宗祖とは異なって、道元が戒律と、如法に叢林の行持を行じ

ていくことに重きを置いたのは当然でありました。しかし、誰もがそのような修行ができる能力をもっているわけではないことを道元は熟知していました。事実上、彼の考えでは、そのような人々が仏教の果実から閉め出されるということはありませんでした。「(仏祖の大道に証入するのは)ただこれ、こころざしのあり、なしによるべし、身の在家、出家には、かかはらじ。(中略)また、釈尊の在世には、逆人邪見、道をえき。祖師の会下には、獵者、樵翁、さとりをひらく。」道元はこのように述べています。

日本の偉大な仏教者の中で、道元ほどに、中国や日本において、女性が男性よりも、精神的に、道徳的に、そして社会的に劣っていると考えていた聖職者を厳しく糾弾した人はありません。多くの大乗仏教の経典が、伝統的に、女性には生得的に五つの障害があるので、女性の身のままで成仏できない、最後身において男性に生まれ変わらなければならないと説いています。女性はまた多くの大きな仏教寺院の境内に立ち入ることを禁止されていました。生来女性は欲望が強く、女性の出入りを禁止しなければ純潔な僧侶をいや応なく墮落させてしまうと考えられていたからです。

道元にとって、そのような非道な偏見は、彼が理解した仏法の根本的な真理とは両立できないものでした。道元は両性の平等を主張して一歩も譲らなかつたのです。「たとえば、正法眼蔵を伝持せらん比丘尼は、四果支仏および三賢十聖もきたりて礼拝聞法せんに、比丘尼、この礼拝をうくべし。男児なにをもてか貴ならん。虚空は虚空なり。四大は四大なり。五蘊は五蘊なり。女流も又かくのごとし。得道はいづれも得道す。ただし、いづれも得法を敬重すべし。男女を論ずることなかれ。これ仏道極妙の法則なり。」(道を得た比丘尼は、阿羅漢や独覚や菩薩の礼拝を受けてしかるべきである。人間の体を構成する四大や五蘊は男も女も同じである。男も女も同じく道を得ることができる。男女の間に差別をたててはならない。これが仏教の究極的な教えである。)

道元はまた、「女性は誘惑である」という偏見に反論する。「又いま至愚のはなはだしき人おもうことは、女流は貪淫所対の境界にてあり、とおもうところをあらためずして、これをみる。仏子如是あるべからず。淫所対の境となりぬべし、とていむことあらば、一切男子も又いむべきか。染汚の因縁となることは、男も境となる、女も境縁となる。非男非女も境縁となる。夢幻空華も境縁となる。あるいは水影を縁として非梵行あることありき、あるいは天日を縁として非梵行ありき。神も境となる。鬼も境となる。その縁。かぞへつくすべからず、八万四千の境界ありと云ふ、これみなすつべきか、みるべからざるか。」(女

性が淫欲の原因であると信ずるのは愚の骨頂である。もし貪欲の対象になるものはすべからず蔑むべきだとすれば、女性だけではなく、男性も蔑まれるべきではないか。女性と同じく、男性も貪欲を惹起することはある。ときには、水に映った月影のような非生物にさえ、官能を刺激され、淫らな行為にみちびかれることもある。それだからといってそれらのことどもを見ることを避けなければならないだろうか?)

道元は我々の世界とは非常にちがった世界に住んでいたのですが、彼が提起した事柄のなかには、700年後の今日の社会で熱気をもって論じられていることと一致することが多くあります。おそらく、彼の同時代の人々よりも飛び抜けて、深く人々を縛っている固定概念に挑戦し、不正に対して力強く、はっきりと発言する覚悟をもっていたのでしよう。道元の思想は、正伝の仏法と名付けられた根本的な真実を映しているものでありますから、21世紀のはじまりの今においてもその意義を失ってはいないのです。

私の知る限りでは、アメリカ大陸に最初に足跡を残した曹洞宗の僧侶は、優れた学者でもあった忽滑谷快天師(1867~1934、駒沢大学学長)でした。同師は、曹洞宗の要請を受けて、アメリカとヨーロッパにおいて、研究と講義の為に2年間を過ごしたのです。忽滑谷師は1911年10月にサンフランシスコに到着し、翌月に公開講義をされました。日置黙仙師、山上曹源師、そして新井石禅師などの著名な曹洞宗僧侶が何人も忽滑谷師に続いて訪米しました。どう云うわけか、それらの人々はみな当時の合衆国大統領(ウィルソンとハーディング)と会見することに成功しました。彼等が、坐っている合衆国大統領に向かって説法をしたと想像するのは愉快なことです。残念ながら錚々たる曹洞宗の僧侶と合衆国元首との間にどのような問答がなされたのか記録には残っておりません。

アメリカを訪問した僧侶達とは別に、1922年、磯部峰仙師がロスアンゼルスに北アメリカ曹洞禅協会を設立したことによって、曹洞宗はアメリカ本土に公式に進出しました。四年後、磯部師はロスアンゼルスに北米山禅宗寺と云う本格的な寺院を創建されました。同寺は後に、永平寺、総持寺両大本山別院に指名されました。1934年、磯部師はサンフランシスコに移転し、放棄されていたシナゴーク(ユダヤ教会堂)を買収し、仏教寺院に改装して、日米山桑港寺と名付けました。

磯部峰仙師の一般の人々に対する関心と曹洞宗の教えと修行を広めようとする熱意は道元の精神をよく体現したものと云えます。朝鮮開教に従事している途中、磯部師は、1913年、曹洞宗宗務庁からハワイに移転して寺院を建立するようにとの要請を受けました。後に同師は、ハワイ開教

総監に任命されました。その在任中の1920年、磯部師と彼の指導するハワイミッションは、6ヶ月におよぶ激しいオアフ砂糖農場のストライキの間、日本人および日系アメリカ人の農場労働者を支援するための重要な役割を果たしました。権力を敵にまわして大いに労働者を支援したのです。

日本では、臨済禅と曹洞禅の特徴を要約する、含蓄のある表現を聞くことがあります。それは、「臨済將軍、曹洞土民」というものです。これは、臨済宗が京都や鎌倉（將軍）等の大きな寺によろうとする傾向と、それに対して地方に住む一般庶民の中に深く根をおろそうとする曹洞禅との対象を表現したものです。仏法の普及と社会的正義の為の戦いに対して同等に身を呈した曹洞宗僧侶として、磯部峰仙師は、一生をこの曹洞禅の精神に捧げたのです。

スタンレイ・ワインシュタイン

駒沢大学で学士号を取得。同大学在学中、沢木興道老師のもとで坐禅修行をする。東京大学で修士号を、そしてハーヴァード大学で博士号を取得。ロンドン大学東洋・アフリカ研究所において六年間東アジア仏教科講師を勤めた後、1968年よりイェール大学仏教学教授の任命を受け、現在もその職にある。



道元禅師ご生誕800年慶讃行事

道元禅師シンポジウム

講演要旨

10月23日

道元禅師：その法を嗣ぐということについて

大谷哲夫

道元禅師は、入宋して如浄禅師の仏法を学び、如浄禅師の仏法を受け嗣ぎ、その仏法を日本に自ら伝え、その仏法は後世に伝えられ、今日も多くの人たちに受け嗣がれているのは言うまでもない。

道元禅師は如浄禅師より仏法を師資相承したのであり、道元禅師が受け継いだ仏法は嗣法と言う儀式を介して今日に至るまで師資相承されているのは周知の事実である。

道元禅師は仏法を受け嗣ぎ、それを弟子に伝えるということに重要な意義を見いだしている。その法を嗣ぎ伝えるということが単に観念論では無くして、師の下に自分の名を連ねると“嗣書”という眼に見える形にリアライズされているからこそ道元禅師の仏法を今日まで伝えることができたとも言えるのである。その意味では、もちろん我々にとっても師から仏法を受け嗣ぎそれを弟子に伝えることこそが最も重要なことなのであるが、その仏法を伝える嗣法と言う儀式についても重要な意義を見いだすことができるのである。

以下、先ず道元禅師の嗣法と仏法について述べ、続いて嗣法の問題を中心に展開された近世の宗統復古について述べ、更に私たちが法を受け継ぐことの意義について考えてみたい。

大谷哲夫

1939年、東京生まれ。早稲田大学文学部東洋哲学科卒業。同大学大学院人間科学研究所で東洋哲学を専攻し修士号を取得。駒沢大学大学院人文研究所で仏教学を専攻し卒業する。1965年、大本山永平寺で修行する。1966年より東京にある長泰寺の住職となる。1977年より駒沢大学で教鞭を執り、現在は仏教学部教授、駒沢大学副学長を勤めている。専攻は禅学および曹洞宗学。

道元とともに生きる： その思想の現代性についての考察

カール・ビュルフェルト

この発表で私は、道元の宗教的思想のいくつかの特徴とそれが現代版道元禅に対して提起する課題について考察する。まず、仏教徒の生活は単に、人間が仏地に至ろうとする営みではなく、道元が時々よぶように「仏地の修行」であり、仏としての我々の本性の発現なのだという良く知られている教えから始める。現代版の道元禅が多く修行の心理的な側面に焦点を当てるのに対して、道元自身はその歴史的特徴を強調し、修行を禅の祖師達の系譜の中で伝えられてきた、歴史的な釈迦牟尼仏陀の修行の再現と見ることを好むということを指摘する。その結果として、道元の仏道修行は個人的な経験よりも、公的な行動を強調する傾向にある。そして、道元の修行の説明は坐禅の行を中心とする叢林の生活を前提とする傾向がある。もしも、そのような道元の世界観の特徴が、現代の、在家指向の宗教に対して明らかな問題を提起するものであるならば、道元版の、歴史的な共同体への参加としての宗教的努力が、多くの現代生活における個人主義的特徴の閉鎖性と社会的混乱に対する歓迎すべき矯正手段を提供するのではないかと提案する。

カール・ビュルフェルト

サンフランシスコ桑港寺において、鈴木俊隆老師について坐禅修行を始め、京都安泰寺において内山興正老師について修行を続ける。30年間曹洞禅仏教徒である。カルフォルニア大学バークレー校において、アジア学専攻で修士号を取得し、仏教学専攻で博士号を取得。1980年よりスタンフォード大学で教鞭を執る。現在、同大学仏教研究センター所長。日本においてもいくつかの研究所の研究者となる。多くの仏教についての著作を発表している。

道元禅師の坐禅

全慶・ブランチ・ハートマン

中国から帰国されてすぐに書かれた著作で道元禅師は仏法の正門としての坐禅の第一義性を強調された。弁道話に、「弘法救生をおもひとせり、」と書かれている。これは坐禅に対する帰依の説明的表現である。帰依するとは誓願することである。これから禅師の端坐に対する果てしない信頼と専念を見ることが出来る。「諸仏如来、

ともに妙法を単伝して、阿耨菩提を証するに、最上無為の妙術あり。これ、ただほとけ、仏にさづけてよこしまなることなきは、すなはち自受用三昧、その標準なり。この三昧に遊化するに、端坐参禅を正門とせり。」多くの引用を駆使して、道元禅師の坐禅に対する信とそれを修行の本質的な表現として弘通することに専念されたかを検討する。

全慶・ブランチ・ハートマン

1969年、バークレー禅センターにおいて宗純・メル・ワイツマン師について、またサンフランシスコ禅センターで鈴木俊隆老師について坐禅を始める。1977年、禅達・ベーカー師について出家得度を受け、1988年宗純・メル・ワイツマン師より嗣法を受ける。タサハラ禅心寺、グリーンガルチ蒼龍寺において修行する。1996年サンフランシスコ禅センター尼堂頭に就任。聚雲・ルー・ハートマン師と結婚し4人の子供と5人の孫がある。

道元禅師の叢林行持の規範（永平清規）

奥村正博

正法眼蔵随聞記（6-9）で、道元禅師は、中国の龍門を通過するとどんな魚も龍になるという言い伝えについて話されている。魚が龍門を通過するのと同じく、人が叢林に入れば必ず仏祖になると言われる。

「処も他所に似たれども、叢林に入れば、必ず仏となり、祖となるなり。食も人と同じく服くし、飢えを除き、寒さを防ぐ事も、同じけれども、只頭を円にし、衣を方にして、斎粥等にすれば、忽ちに衲子となるなり。成仏作祖も、遠く求むべからず。只叢林に入ると、入らざるとなり。龍門を過ると、過ぎざるとなり。」

禅宗の叢林の修行の規範である清規は9世紀に百丈懐海によって作られたと言われている。道元禅師も、百丈の精神を維持するために、「永平清規」を書かれた。清規は道元禅師の教えと修行の中で非常に重要な側面である。現在、我々が経験している激しい社会的、文化的流れの中で、道元禅師の修道規範の現代における意義を見い出すことができるだろうか。

奥村正博

1948年、大阪生まれ。1970年、内山興正老師について出家得度を受け、京都安泰寺において修行。1975年から1981年までマサチューセッツ州・バレー禅堂で修行。1984年から1992年まで京都曹洞禅センターで指導。1993年から1997年までミネソタ禅センターで坐禅修行と翻訳に

従事する。現在、曹洞宗北アメリカ開教センター所長。英訳書に、「Shobogenzo Zui-monki」、「Dogen Zen」、「Shikantaza-an instruction to zazen」、「Zen Teaching of "Homeless" Kodo」、「Wholehearted Way」、「Opening the Hand of Thought」などがある。

三百則と仮名正法眼蔵

大道・ジョン・ローリ

道元禅師の主著である「仮名正法眼蔵」は、英語だけでなく、ヨーロッパ諸国語に翻訳されて、かなり以前から読むことができる。仏教を修行している人々だけではなく、西洋の学者や哲学者も仏法についての道元の深い洞察、その独自の形而上学、そして独創的な言語の使用法に魅せられている。「仮名正法眼蔵」によって、道元は日本の最も偉大な思想家、宗教家の一人であるとの評価を得ている。

それほど広く知られてはいないが、同等に重要な道元の著作に、漢文で書かれた「真名正法眼蔵」がある。「真名正法眼蔵」は宋代のテキストから選ばれた三百則の公案を集めたものである。それらの公案は道元によって、「仮名正法眼蔵」の執筆や、道元の上堂の記録である「永平広録」の編集の“種本”として使用された。道元は只管打坐の提唱者であり、公案禅に対する歯に衣を着せない批判者であったので、「真名正法眼蔵」が道元の著作であるかどうかは幾世紀ものあいだ疑問視されてきた。しかし、最近の学者の研究によって、その疑問に終止符が打たれた。

今回の発表では、これら二つの「正法眼蔵」の関係について検討する。特に、宋代の古典的な禅者の提唱における解釈と比較して、道元の公案の取り扱い方の独自性を強調する。道元の指導法に関して一般に信じられているのに反して、道元は公案を自由に使用したばかりではなく、中国の先駆者達とは根本的にちがった使い方をしたのである。洞山大師の五位を織りまぜることによって、弁証法的な緊張を作り出し、多層的な詩的言語を使って、道元は伝統的な公案に、新鮮なそして洞察に満ちた見方をもたらしたのである。

この発表において、三百則の中から、「仮名正法眼蔵」で道元が扱ったいくつかの則を提示する。それらの公案に対する道元の解釈を、「従容録」や「碧巖録」における同じ公案についての解釈と比較する。それらの公案についての解説の仕方は非常に違っているように表面的には見えるけれども、それらは、本質的には同一であり、歴史的な仏陀の時代から伝えられてきた仏法の真実と矛盾するもので

はない。結論として、伝統的な公案の研究や修行に付け加えて、道元の公案に対する異なった見方を用いることの価値について論じる。

大道・ジョン・ローリ

ニューヨーク州・マウント・トレンパーにある禅マウンテン・モナストリー（道真寺）堂頭。1968年に禅の修行を始め、深遠な道元の禅と、臨済禅の公案をつかった内観とを修行する。前角博雄老師より嗣法を受け、玄法・マーゼル老師より印可を受ける。禅について12冊の著作があり、現在、棚橋一晃氏とともに道元の「真名正法眼蔵三百則」を翻訳すると共に、それに注釈と偈文をつけている。

10月24日

曹洞宗の歴史

グリフィス・フォーク

徳川時代（1603～1868）以降に書かれた曹洞宗の最初期の歴史書は、道元に連なる法を嗣続した著名な祖師達の列伝の集成でしかなかった。学者達が、曹洞宗を、道元によって創立され、社会的、経済的、政治的状況の変化に応じて展開してきた一つの教団として扱いはじめたのは、二十世紀に入ってからに過ぎない。現代書かれている歴史書においてくり返されるテーマは、道元によって、日本で確立された禅は純粋なものであったが、後世の曹洞宗はその純粋性を維持できなかったということである。

私は、現代の学問的方法を奉じるのであるが、元来の純粋な、あるいは本質的な曹洞禅の性格を代表するとされる一定の信仰や修行について規範的な主張をすることはさける。私の曹洞宗についての定義は、その構成員の過去と現在における単純な輪郭を描くことから出発する。そして、その特徴的な、組織、修行そして教義の問題は完全に歴史的な研究調査に開かれている。日本曹洞宗が歴史的に、広く東アジア仏教の伝統の中で占めてきた位置に焦点をしばり、私は禅と仏教との関係の問題を扱う。私は、我々は余りにも早急に、禅の独立と独自性を主張してしまって、東アジア文化の中での仏教全般の中に埋め込まれているあり方を無視し過ぎてきたのではないかと論じる。我々は、禅が何か完全な教義的、倫理的そして精神的な体系であるように想像する。それで多くの中国や日本の禅僧達が当然だと考えてきた、より広い経典、儀式、そして組織的な仏教の資産を利用しないのではないかと。

グリフィス・フォーク

サラ・ローレンス大学でアジア宗教学を教えている。ミシガン大学から仏教学の博士号を取得。1985年から1995年まで同大学で教鞭を執る。日本において、曹洞宗と臨済宗両方の僧堂で修行し、1983年、曹洞宗の出家得度を受ける。仏教と人間の価値の研究の為のクロダ・インスティテュート理事会のメンバーである。1987年から1994年まで、アメリカ宗教学会の仏教部門運営委員に選出された。フルブライト、永平寺、および、日本基金などの特別研究員の資格を得る。アメリカン・カウンシル・オブ・ラウンド・ソサエティおよびナショナル・エンダウメント・フォー・ヒューマニティの補助金を授与される。研究と著作の焦点は、中世中国仏教における禅の伝承と実態の、哲学的、文学的、社会的そして歴史的側面、および禅の歴史に当てられている。

現代日本の曹洞宗

奈良康明

現代日本の曹洞宗はおよそ1万5千ヶ寺を擁し日本の伝統的な仏教の中では最大の教団である。「現代」の意味は一応、明治（1868~1912）以降とする。

1) 住職の有り様（専任、兼職、学歴、結婚等）を例として、教団の今日の社会における位置付けを試みる。資料は「曹洞宗宗勢総合調査報告書」（曹洞宗宗務庁、1995）による。

2) 今日、曹洞宗が直面し、具体的に対応している国内的諸問題は人権と環境の問題に集約できる。人権に関しては、被差別部落解放にかかわる差別戒名、差別意識撤廃への努力等がなされている。先ず差別の生じた原因を教学に求める主張があり、それは業および本覚思想の解釈にかかわっている。

環境に関しては、檀信徒各家庭に向けての環境浄化の実践運動（グリーン・プラン）が実施されている。環境問題に関しては、旧来日本の仏教界では、「悉有仏性」を自然愛護の理由ないし根拠とする傾向があった。これは理論的に十分ではなく、それを含めて、宗学上からの自然、環境保護への基礎理論および環境倫理樹立への動きがある。

3) 曹洞宗には旧来、宗学研究所、教化研修所、現代教学センターの三研究、研修機関があったが、1999年4月1日、これらは統合され「曹洞宗総合研究センター」として発足した。これは三者を単に集めたものではなく、それぞれの研究方法と領域を生かしながら、なお学際的に協力し、有機的な研究を行うものである。そのために「共同研

究」テーマを設け、検討することになっている。最初のテーマは「葬祭」である。

葬祭は曹洞宗のみならず、日本仏教界全体が直面している問題である。社会的には、先ず共同体を結ぶ絆としての葬祭の旧来の機能は失われ、又散骨とか、無宗教葬などの新しい葬法への関心が増大している。戒名の意義、又、院、居士号への疑義も提起されている。宗学面では、まず、葬祭が全寺院で行われ、教団の財政的基盤となっている儀式であるにもかかわらず、伝統宗学の中に位置づけられていない。したがって、たとえば、葬祭儀礼における授戒、没後作僧（死後に授戒し、僧としたうえで葬儀を行う）ないし「覚霊」（授戒してすぐに覚った霊と呼ばれる）、等の宗学的検討が十分であるとはいえない。あらためて、葬祭の意味と意義を明らかにする必要に迫られている。

4) 国際的には、外国にある曹洞系の禅センターの位置づけ、あるべき関係等が模索されつつある。

奈良康明

東京大学文学部インド哲学およびサンスクリット文学科に学び、1953年に学士号を、1956年に修士号を取得。1956年から1958年まで、インドのカルカッタ大学で比較哲学部に学ぶ。1973年東京大学より文学博士号を取得。1961年より駒沢大学で仏教文化を教える。1983年から1986年まで同大学副学長、1994年から1998年まで学長を勤める。1982年から83年までインドのヴィシャ・ヴァバラチ大学の客員教授。著書に、「仏教の歴史：インドと東南アジア」、「ラマクリシュナ」、「シャキャムニブツダとの対話」、「仏道と人間精神のアプローチ」などがある。

アメリカの禅

宗純・メル・ワイツマン

サンフランシスコの鈴木俊隆老師や、ロスアンゼルスの前角博雄老師などがアメリカに來られて、アジアに於て幾世紀もの間進展してきた禅僧の修行である日本の「スクエア禅」は、アメリカのカウンター・カルチャーの通俗化した禅哲学である「ピート禅」と出会った。1960年代を通じて、アメリカ社会の広範囲から出自した人々がそれらの指導者について学ぶためにやってきた。それら指導者達は彼等に、只管打坐の坐禅を与え、指導者自身の修行を通して道元禅を伝えた。

70年代と80年代には、禅センターは急速に発展した。その急激な発展は、指導者の誤りによって幾らかの困難に遭

遇したが、最終的に満足できる解決を見た。道元禪の心髄は、何日もの接心、提唱、講議、そして勉強会などを通して、居住者がいるセンターでも、皆が通いで坐禅にくるセンターでも修行されている。同時にアメリカの禪修行者は、日本の先駆者に比べて、男女の差別なく法を提供すること、アジアの出家修行者と同等の厳しい在家の修行、環境、人種の平等、平和、社会の不公正をつくり出して様々な問題に取り組むこと、そして家族を含めた修行の重要性等を強調している。それらの新展開は価値あるものだけでも、道元禪からアメリカへのもっともユニークでもっとも貴重な贈り物は、これまでも又これからも坐禅修行である。

宗純・メル・ワイツマン

1964年サンフランシスコの旧桑港寺に於て鈴木俊隆老師について坐禅を始める。鈴木老師の勧めで1967年に開いたパークレー禅センターにおいて、1969年に鈴木老師より出家得度をうける。1970年、立髪老師がおられるとき、タサハラで首座を勤め、1972年から1973年までタサハラのディレクターを勤める。1984年鈴木俊隆老師の法嗣、鈴木包一老師より嗣法を受ける。1985年パークレー禅センターの堂頭となる。1988年サンフランシスコ禅センターの堂頭に就任、1997年1月任期満了となり、現在は同禅センターのシニア・ダルマ・ティチャー（堂頭を経験した指導者）である。

戦争の時代に平和を誓願する

法山・アラン・スナキー

平和について黙想しながら、私は道元の教えを聞く。「正法眼蔵四摂法」に道元は、「怨親ひとしく利すべし。自他同じく利するなり。」と書いた。同じ巻きに、「転じがたきは衆生のころなり。」ともいわれている。厳しい内戦と政争に明け暮れた彼自身の時代においてさえ、道元の徹底的な思考と言語は平和の心髄に切り込んだ。彼の生きた13世紀の世界は、我々の世界とは異なるものの、苦しむ衆生の対立と悪業は同じである。

この発表で私は仏教徒として、平和構築に関して3つの方策を提唱する。布施、無畏、そして放下である。平和の実践は与える事つまり、檀那波羅蜜である。心遣い、友情、そして物質的援助を与える事。精神的な教え、共同体、そして組織を与える事。平和の実践は無畏である。恐れそのものが未知なるものへの開けを可能にする。自分自身の恐れの内の中に平和を築くならば、みんなの恐れが崩落

し、尊敬に変化する場が存在する。放下あるいは放捨と布施とは切ってもきれない関係にある。道元は書く、「もしよく布施を学するとき、受身、捨身ともにこれ布施なり。」しかし放下は禪の修行者にとって困難な原理である。今日の物質主義の世界に存在する禪の道は放下の意味については単に口先で云々するに過ぎない。

ベアリング・ウィトネス (Bearing Witness、証人となり、証言をする事) は完全な受容と不二性の菩薩行である。ベアリング・ウィトネスは又積極的な抵抗と社会変革に我々を導く。暴力が行われる処に我々は証人となり、それを証言する事を誓願する。我々自身の心の中に、貪りと怒りと愚痴と云う条件に屈服し、暴力を許容するものがあるのを認める事を誓願する。我々は怒りにかられて、あるいは、国家や、さまざまな権威と連携して、武器を取ることのないことを、しかし、たとえ我々の命を危険にさらすとしても、平和の為に、積極的にそして非暴力をもって介入する事を誓願する。

こうした精神に基づいて、社会参加仏教徒と、すべての信仰の伝統をもつ人々は、平和の為の非暴力の軍隊を作り出す事を願う。小地域あるいは大地域の、宗教的、又人種的紛争や戦争において、この平和軍は、武装兵士、地雷、戦車およびジェット戦闘機にとってかわる事ができるであろう。平和軍は、戦闘員や市民と同様の危険に耐えつつ、他の人々を救うために戦火のまただ中、戦場に坐りこむような事もあるであろう。禪の修行において危険を背負う事は必要である。平和を構築するのに危険が伴うのと同じように。

道元や釈迦牟尼仏陀を社会参加仏教徒として特徴付けるのは拡大解釈である。しかし仏祖方は、仏法は我々の経験そのものだと言えられる。世界において、健全なものに目覚めよ。このとき、この場所、この状況の中において仏教を創り直せ。菩薩は我々の中であって歩む、と。どの一呼吸の間にも、だれしも悟れる人となりうる。次の一呼吸の間に、我々は不思議と暴力の旧弊に失墜する事もあり得る。坐禅は、この選択はいつでも我々とともにある事を示すのである。我々のもっとも迷ったそして有害な行動の中に、素晴らしい平和の花ともなり、また恐るべき害悪の華を咲かす事もできる種が含まれてあるのである。

法山・アラン・スナキー

1991年より、ブデリスト・ピース・フェローシップ (仏教平和協会) の理事をつとめる。社会参加仏教の国際ネットワーク実行委員会委員をつとめ、アジア、ヨーロッパおよびアメリカの在家および出家の活動家と連携して活動する。鈴木俊隆老師の法系の曹洞禪の僧であり、1998年9月

に宗純・メル・ワイツマン老師より嗣法を受ける。妻ローリと二人の幼い子供とともに、カリフォルニア州バークレー禅センターに住んでいる。他の分野では、アメリカの伝統音楽を学びその演奏者としてもひろく知られている。

山々にかくされた山々

ゲリー・スナイダー

私の発表において、ダルマに対する道元の並外れた多面的な洞察が、いかにして、人類文明が自然界に与える影響について、現在おこなわれている世界的な論議に対して寄与できるかを話したい。

その最初期から、ほとんどすべての東アジアの思想や宗教は、自然や人間以外の存在に対して高い尊敬を払ってきた。特に仏教では、自然との関係に心をとどめ、敬意を払うように求め、又我々は自然から離れた存在ではないと教える。

それにもかかわらず、仏教的風景はこの何世紀か、いくつかの明るい点はあったものの、深刻な環境破壊に苦しんできた。今日、全世界が、大規模な環境問題や社会問題と取り組んでいる。仏教の教えと修行はこれまでにまして意味あるものになりつつあるように思われる。

深遠なダルマの解説者である道元禅師は、現象的存在と我々との関係について極端に単純な見方を提起することはない。道元禅師の教えは、単純な「自然崇拝」や、「人類の悪業」と「純粋な自然界」との対比といった素朴な二元論を準備することもない。

最近、何人かの現代思想家達は、道元の思索を彼等自身のモデルにしたがって自己流に解釈して「デコンストラクティブ (deconstructive)」であると評している。私は、道元の難解な（しかし必ずしも複雑ではない）教えは、虚無的なデコンストラクショニズムと、そして、素朴な、（よくいえば）希望に満ちたさまざまな生態学的哲学とに対する、必要な拡張であり又矯正であると指摘したい。これらの諸点を私は、詩を交えて説明するつもりである。

ゲリー・スナイダー

詩と散文の本を17冊出版しており、1975年にピューリッツァー賞を受賞した「亀の島」や、1992年度、ナショナル・ブック賞の最終候補になった「ノー・ネイチャー」等が含まれる。現在カリフォルニア大学デービス校の英語教授として、「自然と文化」プログラムの開始に従事している。1950年代後半、アレン・ギンズバーグ、ジャック・ケロウック等とともに、ベスト・ジェネレーション運動において

著名であった。1960年代、日本の禅の僧堂で修行し、思想的に大きな影響を受けた。シエラネバダにあるリング・オブ・ボーン禅堂の創立者の一人である。1998年、日本の仏教伝道協会財団より、仏教伝道賞を受賞した。同賞を受賞した最初のアメリカ人文学者であり、生涯にわたる、詩と散文の作品を通して、禅の思想と自然界への尊敬を結び付けた功績を讃えられたものである。最近の著作に、「終わりになき山河」がある。



私の『坐禅参究帖』(4)

マサチューセッツ州ヴァレー禅堂
藤田一照

《断想 12》 アタマといのち

瞑想行で重点が置かれているのはあくまでも、当人が知覚し意識できる心理的次元のことである。だから、その方法も成果も覚知可能な（本人にそれとわかる）ものでなくては意味をなさない。それは知情意等の高等精神作用を司るとされている大脳皮質の守備範囲にかかわることなので、我々の感覚・感情・思考・意識状態などをここで仮に、アタマとよぶことにする。要するに、瞑想とはアタマに焦点を絞った営みだというふうに言えるだろう。

私は、坐禅を始めたのと同時に、伊藤真愚先生や横田観風先生から東洋医学の初歩を学んだ。その時、おもしろいと思ったことの一つは、東洋医学で重視するのは内蔵（五臓六腑）の調和であり、アタマの問題はそこから派生して

くる二次的なものとされていることだった。その当時、私は心理学の院生で、知らず知らずのうちに「人間＝心理＝アタマ」というような偏見に陥りつつあったから、これは非常に有り難い示唆だった。

そして、「いのちの土台である内蔵の不調和のために機能不全になっているアタマ。それが引き起こした騒動を、その同じアタマをつかってなんとかしようとして右往左往しているのが我々の実態ではないのか、もしそうだとするならば、内蔵間の調和を取り戻して、アタマが正常に働くようにならないかぎりいつまでたっても事態はおさまらないだろうな・・・。」そんなことを考えたりしたものだ。

さて、発達した大脳皮質を授かった我々人間は、幸か不幸か、「自我意識＝オレ」を持つことができる。そして、この「オレ＝アタマ」が主人公であり、身体はその命令に従う召使でもあるかのように思い込んで暮らしている。しかし東洋医学のいのちの見方からすれば、これはアタマの一方的な思い上がりであり、全くの事実誤認ということになる。いのちの事実においては、アタマはよりおおきないのち全体のホンの一部にすぎない。アタマが勝手にそう思っているだけのことで、実は、そんな特権的な位置など占めてはいないのだ。

生命は環境に適応して生存を維持していくために、外敵や食料を弁別し、逃げたり取ったりしなくてはならない。その能力が長い長い年月をかけて高度に発達をとげ、我々のアタマとして結実したのである。しかしある部分が他とのバランスを欠くほどに、異常なまでに発達を遂げると、いのち全体からみてマイナスの作用をもたらしかねない。生物進化の歴史にはその実例がたくさんある。では、人類における大脳皮質の発達はその例にあたるのだろうか。それは我々次第だというしかあるまい。

確かに、そのまま放っておけば、アタマは暴君のように振る舞い、暴走・独走してしまう困った存在かもしれない。しかし、我々人間はそういうアタマを持つべく定められている（我々の側に選択の余地はない、我々は出来合い品なのだ）存在である以上、よかれあしかれ、それをひきうけて生きる道を歩むしかないだろう。

エサや配偶者の獲得、外敵から身を守ることといった、生存に「直接」寄与しない活動と言える、坐禅や瞑想をなぜ人だけがするのだろうか。瞑想にしろ坐禅にしろ、進化の産物として、こういうアタマという問題をかかえるに至った「ヒト」という観点から、その意味を考えていくことも、またおもしろいのではなからうか。

今はこの問題には、これ以上立ち入らない。ただ、瞑想がアタマに焦点を当てて、そのなかで何とかしていこうというアプローチであるのに対し、坐禅はむしろ、アタマを

アタマとしてなりたたせている基盤、生きたまるとのからだに目をむけているということを指摘しておくにとどめる。アタマが過剰に働いていのちをひきづり、バランスが失われ分裂している状態が、坐禅の姿勢にまかせていくことで、自然に（アタマではからった結果ではなく、それを一切止めることで）、落ち着くところへ落ち着いていく、つまりアタマが本来あるべき分限を守り、いのちが調和し統一体として活動するようになるのだ。

アタマという部分ではなく、いのちの全体性を問題とし、「身心を調べて以て仏道に入る」（『学道用心集』）営みである坐禅は、東洋医学と共通の深いいのち観に根ざしているのだと思う。

《断想 13》 内臓のはたらきと坐禅—その一

この一見突飛な組み合わせの表題は、比較解剖学者の故三木成夫氏の著書『内臓のはたらきと子どものころ』（築地書館 刊）を、もじったものだ。この本は「みんなの保育大学」というシリーズの一冊で、保育関係者向けの話をもとにしたものだが、私には坐禅のことを考える貴重な参考書になっている。

今から十五年ほど前のことになるが、私が安泰寺に居士として入ってしばらくしたころ、羽鳥操さん（長年、野口三千三先生に師事し、最近『野口体操・感覚こそ力』（柏樹社刊）を上梓された。）から、そのころ出版されたばかりのこの本が送られてきた。そして「ただ坐ることに男子の一生をかけて決しておしくない。体壁系を静めて、内蔵系の自分をしっかりと見据え、とらえる。呼吸を通してまるごとの自分の存在の実感をつかめたら・・・。人類＝自然＝宇宙にとっての大仕事ではないかしら。」という言葉が添えられてあった。

臨済宗のお坊さんから習った数息観をやめて、只管打坐の坐禅に切り換えて自分なりに一生懸命やっていたが、「こうやって、ただ坐っているけど、それって一体何をやっていることなのだろう。」という、割り切れぬような、途方に暮れたような感じにおそわれ始めていたところだった。ちょうど、そこにこの本とそういう手紙が届いたのだから、「天の配剤」とでもいうしかない。おかげで、目の前が開けたような明るい気持ちになれたものだった。

三木先生の名前は、野口体操教室で時々耳にはしていたが、この本で初めて氏の学説に触れることができた。それ以来、私は三木学説の熱烈なファン(?)となってしまう。

この本には、人間苦の究極の引き金とされる「無明」・avedana・の本来の意味は「内臓不快」である、「生命記憶」、「生の波動」、「内臓のはたらきは遠い宇

宙の彼方との共振によって支えられている」・・・等々、興味の尽きない話がたくさん盛り込まれていて、私にはそれがみんな仏教や坐禅のことに直接つながってくるのだ。ここでは氏の「内臓系と体壁系」についての話が、坐禅にどうつながるかを書いてみたい。

人間のからだは体壁系（外皮系・神経系・筋肉系）と内臓系（腸管系・血管系・腎管系）とに分類できる。前者は感覚・伝達・運動をつかさどり、「動物機能」が営まれる。後者は吸収・循環・排出をつかさどり、「植物機能」が営まれる。

「生命の主人公は、あくまでも食と性を営む内臓系で、感覚と運動にたずさわる体壁系は、文字通り手足にすぎない。つまり内臓系が本で、体壁系は末という本末の関係にある。ところが我々の日常を振り返ってみると、目につきやすい体壁系にばかり注意が注がれ、内臓系の方はおろそかにされている。まさに本末転倒である。」と三木氏は語り、こうした傾向を反省して、「はらわたの見直し＝内臓の復興」をはかるべきだと訴えている。これは保育・教育における重大な問題であるにとどまらず、生きること全体にかかわわる根本問題ではないだろうか。

ここで話がいきなり飛んで釈尊の話になる。釈尊は当時のインドで代表的な修行形態であった瞑想と苦行を徹底的に試みられたが、満足されずそれを捨て、菩提樹下に坐禅するという独自の道を選び、ついに正覚を成就されたという。私は、この釈尊において起こった修行上のシフトがいったいなにを意味しているのか、いろいろ思いをめぐらしているのだが、一つの言方として、この三木氏の説を借りてこう言えないだろうか。「体壁系優先の修行から内臓系優先の修行へ」と。

体壁系優先の修行では、その中枢である脳（アタマ）のはたらきによって創られた精神と肉体の二元論に立って、精神を肉体から引き離してそこに精神の安静を得ようとする（瞑想）、あるいは肉体を傷つけ苦しめることにより肉体の束縛を弱め、精神の自由を得ようとする（苦行）。だから内臓系のなかに息づいている「食と性のリズム」は、精神の安静と自由を攪乱し束縛するので、厭い捨てるべきものとされる。

一方、内臓系優先の修行では、体壁系のつっぱり、硬結をほぐし、ほどいて（ほどけ→ほとけ）、内臓系が本来のリズムをとりもどすような条件を整備し、体壁系はそれを乱さないように、静かに、慎んでいる。

こういう内臓系優先の行から生まれたのが仏教だとすれば、それを「内臓の復興」の道だといってもいいのではないかと思うが、それはあまりに強引なコジツケというものだろうか。

《断想 14》 内蔵のはたらきと坐禅—その二

三木成夫先生（1925～1987）は、「アタマ」と「ココロ」を区別して、「『切れるアタマ』とはいうが『切れるココロ』とはいわない。また『温かいココロ』はあっても『温かいアタマ』はない。アタマは考え、ココロは感じる。」そして、この「アタマ」と「ココロ」という大和言葉にどうして「頭」と「心」という漢字を当てたのかと問いかけ、太古の人々が、肉体的な実感に基づいて、アタマの座を頭脳に、ココロの座を心臓に置いたのだろうという。つまり「アタマ＝脳＝体壁系」「ココロ＝心臓＝内臓系」という図式が成り立つ。

この図式を通して、坐禅という営みを見なおしてみると、それは内臓系重視の行というしかないと私には思われた。だから、釈尊が坐禅によって正覚をひらき、坐禅が仏道の正門『弁道話』だと言われている以上、仏教は「内臓復興＝ココロの復活」の道と言えるのではないかと、前回かなり強引なことを書いたのだった。

このアタマとココロの区別は日常生活の上ではきわめてあいまいで、しばしば混同されて使われている。私が心理学を学んでいるときに感じたその学問の「底の浅さ」の正体は、そこで対象になっている「心」理がココロではなく、実は単にアタマの範囲にとどまっていたからではなかろうか。ここではこれ以上深入りしないが、三木先生がココロと呼んでいる次元は、宇宙・自然との交響というような雄大なスケールのところにまで拡がっていることを指摘しておきたい。

三木先生が、植物が大地にじっと根をおろして何をやっているのかについて、「『宇宙リズム』とのハーモニーに、まさに全身全霊を捧げ尽くしているのだ。そのからだは、いってみれば天地を結ぶ巨大な循環路の毛細血管にたとえられる。」と書いているところを読んだ時、私はすぐに沢木興道老師の「宇宙と波長をあわせるのが、坐禅である。」とか「坐禅は宇宙いっぱいスイッチのつく法である。」という言葉思い出した。二人は同じことを言っている！

内臓系は、宇宙の諸周期と歩調をあわせて「食と性」の位相を交代させる「植物機能」を司る。我々の内なるこの「植物」の姿をまざまざと現出しているのが、坐禅の姿ということなのだ。だとすれば、釈尊が坐したのが、菩提樹という植物の下であったことも、さらに、さとの契機となったのが明けの明星であったことも、ただの偶然ではなかったのだ。「釈尊成道の図」が語っていることはなにか。坐禅・菩提樹（植物）・明けの明星（宇宙リズム）。それは、「マクロコスモス（大宇宙）」と「ミクロコスモス（小宇宙＝身体）」との共振・共鳴・交響、禅語をつか

えば「感応道交」の図に他ならないのだ。

一見ささやかに見える坐禅という行に秘められた「途方もなさ」を見落としてはならない。私は保育にたずさわる友人達に、三木先生の『内蔵のはたらきと子どものころ』を勧めてきた。それは保育の仕事が、実は宇宙的ひろがりのあるものであり。それだけ重大で、やり甲斐のあるものであることを感じてほしかったからだ。今は、同じ願いから、坐禅をする人達に、この本を勧めたいと思っている。

坐禅を、個人的な悩みや問題の解決法だとか、個人の修養法だと考えている、つまりそれを「人間の沙汰」「世間話」「アタマ」のレベルに引き下げてしまっている人をみかけるが、それでは坐禅の持つ「途方もなさ」「宇宙的（コスミック）なスケール」「ココロ」が彼らの視野の外に取り残されてしまう。そして「坐禅の矮小化」が起こる。三木先生の説を通して坐禅を見なおしてみることは、そういう問題に対してきわめて有効な足掛かりを提供してくれると思う。

三木先生の別の著書の中には、「人類の歴史において、生を中心が「心臓」から、しだいに「脳」に移行してゆく、といわれるのは－（中略）－〈あたま〉が〈ころ〉の声に聞き入る「生中心の思考」が、〈あたま〉が〈ころ〉の声を聞き失う「ロゴス中心の思考」に、しだいに覆われてゆく、思考変革の歴史的な傾向を意味するものと考えられる。そこには、しかし、動植物両器官の持つ本来の双極的な関係が、支配と被支配の主従的な関係に変貌をとげる、ひとつの危険性が秘められていることを忘れてはならないであろう。」という文明批判と人類の運命への警告につながる興味深い指摘がある。ここで言われている「〈あたま〉が〈ころ〉の声に聞き入る」姿が坐禅であり、「動植物両器官の持つ本来の双極的な関係」を回復する道を示しているのが仏道であるといえないだろうか。いまや、文明史・人類史・進化史というような大きな射程において坐禅や仏道の意味を考えてみる時が来ているように思う。

他にも、「普通の論理＝アタマの論理＝分別、仏教の論理＝ココロの論理＝無分別」？とか、「生命記憶＝アラヤ識」？、「アタマとココロの関係」、「内蔵の感受性と言葉の形成」といった問題など、三木先生から触発された坐禅にかかわる面白いテーマがたくさんあるが、今はこれで「三木成夫の世界」からおいとますることにしよう。後の《断想》でまた触れることがあるだろう。

開教ニュース

◆曹洞宗北アメリカ開教センターは、7月末日にロサンゼルスよりサンフランシスコ市の桑港寺へ移転いたしました。移転先の住所は、以下の通りです。

Soto Zen Education Center

1691 Laguna Street

San Francisco, CA 94115

Telephone: 415-567-7686

Facsimile: 415-567-0200

◆去る6月12日、ロサンゼルス禅センター仏真寺においてナカオ恵玉師の晋山式が盛大に執り行われました。

北アメリカ開教センター行持日程

1999年9月～2000年3月

《宗典講読会》

日時：9/12, 10/10, 11/28, 12/12, 1/9,
2/13, 3/12 (各日曜日)

会場：サンフランシスコ桑港寺

内容：午前8：30坐禅、9：10朝課、9：30作務、
10：00奥村正博開教センター所長による
正法眼蔵仏性の巻提唱（英語）

《仏教講演会》

日時：9/10, 10/1, 11/5, 12/3 (各金曜日)

会場：サンフランシスコ桑港寺

内容：午後6：30坐禅、

7：10太源レイトン師による法華経の提唱

日時：1/7, 2/4, 3/3 (各金曜日)

会場：サンフランシスコ桑港寺

内容：午後6：30坐禅、7：10

サンフランシスコ禅センター僧侶による講話

《摂心》

日時：12月1日～7日（臘八摂心）

会場：ウイスコンシン州ミルオーキー禅センター

日時：2月18日～25日（涅槃会摂心）

会場：オレゴン州禅コミュニティ・オブ・オレゴン